

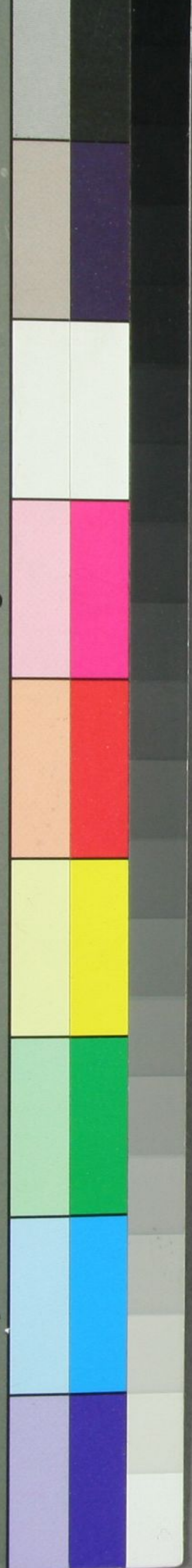
Inches 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Centimetres 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



中村俊定文庫
文庫 18
506

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

命井崎

往昔九十九代後光嚴院延文元年後重光
園松改良基云云計ひして叔汝法師書云
乃菟玖波集と撰る是別勅撰小一して
連秀編集の始也之後百代後土御門院
明應四年小宗祇法師是を承り新撰
菟玖波集^{シラ}撰る也御系山^{シラ}乃宗澄
法師是少少ひて享祿天文乃向ふ於て
御階の佳句と集て新撰大菟波集と撰る
是御階乃書の初めありときく或人生て

海


去つて波が流波乃白紙立至丸苗時の流傳
乃海を以付句は——奥——奥とおふんを
乃——と初も——小藩り——予答云寛
永乃以松水負徳翁大流波の句——小自己
乃句を次て付合——上下二流小編集
——してそと新增大流波と名を——山流
の波と流とありて以末、海よ、川をこは
中、流川と号と我言々と書のおし今云
流川油槽としおはけ時乃、まきあり、共翁

元——和番連方乃道小達——秀方無
備——して排階又名連の人を——文流乃初ッ
く、免許有て流傳一道乃宗匠と稱と又
元和乃比林家庭（巨し）承方乃勅題を以、り
且奥の自派が、廠、小達——御感流く
以此道小放て、真加ある人して排階中言乃
閑袒也然、予う如、不敏不才の身比し
て、争う古哲乃う、おり、た句よ予う、捕、句
を、更へて付合——是、以、名、を、乃、人、よ

まゝの如く事先哲對——甚入必有り
といふも——客又云はふは故を温フルキ タツ子
て新法を以て師と爲りし人傳はれ
け道乃師として人法善道不偏事行
必まあるやと云て頻ふも予借ふべく
世遠く教イハレ申經ケイ抄コウひ先学落
編集世不行き此詭譎古今乃よむべし
如きがうりくく——めけありてゆくは波
大儀は乃とひも空くも載入下子埋と

玉とて深淵に沈ふ小均——人知は心多
故スガタに人して風俗ハ當時不習人乾而と
まてし句、言く一偏もあつは彼黃門
定家乃法教も述可んや宗祇心敬
玄旨法印 貞徳又是も習ふつと貴と
や此して高位に交りし事そ又私
言乃述ありしや諺コトワザ小之れあり曰ふは
上子の傍おしきく然も時ハ古人乃く
はりしは句ハいふくはりく予の描さ

句ハよ〜は〜あ〜平〜是はけ道と
好りの童歌小見地を〜む〜し新古乃
差ふ言は乃る卑句の強弱を堪ひ〜や〜
無〜安〜ん〜や〜終〜お〜一〜侍〜ぬ〜極〜て〜俗論
ホ〜て〜鬼〜を〜逃〜く〜所〜を〜見〜と〜誠〜志〜ま〜く〜ん〜
人〜少〜れ〜一〜再〜々〜流〜波〜乃〜道〜と〜初〜見〜花〜笑〜の
為〜乃〜終〜と〜志〜し〜ひ〜只〜け〜た〜あ〜に〜永〜く〜傳〜へ〜ば〜
く〜依〜て〜安〜永〜々〜流〜波〜と〜あ〜ん〜記〜と〜

屯候齊 林泰道



安永々流波集

春部

○以下八歌撰大流波集也
第一の巻乃有句也
名と記り

○茶盤乃く小妻ハ本おり

○雪乃ちりり〜と云は〜り 物

ぬ〜蝶〜乃〜お〜瓜〜赤〜や〜ぬ〜は〜見〜草〜泰〜道

○あ〜お〜婿〜一〜や〜な〜餅〜祓〜
比

○梅の香乃先〜さ〜入る〜妻〜立〜て

き〜あ〜つ〜た〜よ〜い〜も〜や〜秘〜行〜乃〜山〜社〜全

○中〜あ〜の〜夜〜を〜我〜ハ〜ぬ〜れ〜り

○さか姫入毒立ちく〜尿と〜
山乃穠やう水菓小毒立ち〜 泰道

○志くよのお乃わう甘菜加り

○沢水子漬りて洗ふ〜あうはた

よあうもれた其不畑引〜お全

○うぢと吹く〜おと〜う嚏

○新製ふれ蜂乃もりひ小梅咲て

子那〜滋養さ小漬不園乃毒人

○雪乃よありぬ下雜の作

○毒乃那や〜不〜を集〜らん

毒乃精ぬ〜ハ紫〜〜た全

○所のね〜も花と〜らん

○家わ〜のそのお〜し〜と〜あ〜よ〜せて

毒乃風教中も〜く〜の吹出〜との全

○大長刀子毒風おぬく

○無毒よも〜く〜や〜火と〜と教〜らん

水車〜あ乃神や〜と〜ぬ〜り全

○む〜し〜お〜人ハ〜ん〜ら〜ぬ

○下ノ書もいとよきよと夕よれ
魚木もさるる気枝子風乃足 泰道

○秘藏乃花の枝と物おま

○雪ひきせてはあり春風赤う身子

依中く春雪ふハ雪乃泊る者全

○春ゆく小態勤りの如し

○先はゆき〜〜袴と物さし

ふとほ〜〜と雨乃子蔵全

○吹け〜風乃吹て海

○あんな中とまなく小舟子帆と揚て

子ハ風と揚り登るハ花ん 全

○夏乃肉も痛くあはれ

○花ふぬるころふふふきくあまて

例書外もあふ拙人の翁亦あ 全

○朽や血ふ春乃猿糸

○おと風ちるもやき〜〜と吹立て

夢ハ春といつも雪はく三井の鐘 全

○玉をとり総乃吉柳の糸

○妻房子婦くちたつた松ぬぐり

け妻ハ婦りく鞠小日をとまきり泰道

○尾毛成はく下せり

○水乃乃尾の糸乃氷今解して

虎の尾くゆりまある乃揺持り 全

○あつたきく蜜柑席はる

○正月乃茶の子小奉と扱むり

重箱小一と相ぬけて以乃妻 全

今也イニヤ能キウホシ借キウホシ奮キウホシ中キウホシ世キウホシ行キウホシをキウホシ以キウホシ或キウホシハキウホシ印キウホシ板キウホシ絶キウホシ一

て世キウホシ傳キウホシくキウホシさキウホシ心キウホシおキウホシあキウホシりキウホシ爰キウホシとキウホシ以キウホシ同キウホシ種キウホシハキウホシ美

所キウホシ世キウホシ小キウホシ能キウホシまキウホシとキウホシ能キウホシ借キウホシハキウホシ只キウホシ比キウホシ下キウホシ早キウホシ賤キウホシのキウホシ能

借キウホシ小キウホシてキウホシ取キウホシ不キウホシ足キウホシくキウホシくキウホシくキウホシ能キウホシおキウホシとキウホシ賤キウホシまキウホシあキウホシりキウホシこ

ゆキウホシ多キウホシくキウホシ傳キウホシ小キウホシ聞キウホシ和キウホシ弄キウホシ乃キウホシ道キウホシおキウホシもキウホシ能キウホシ借

亦キウホシまキウホシとキウホシ又キウホシ菟キウホシ玖キウホシ波キウホシ集キウホシ出キウホシとキウホシ青キウホシ十キウホシ九キウホシ能キウホシ神キウホシま

能キウホシ借キウホシ二キウホシ物キウホシ小キウホシ我キウホシしキウホシあキウホシりキウホシくキウホシ其キウホシ金キウホシ言キウホシ妙キウホシ句キウホシを

とキウホシいキウホシもキウホシ智キウホシ人キウホシ稀キウホシありキウホシ遠キウホシ知キウホシ人キウホシをキウホシとキウホシいキウホシ

とキウホシいキウホシもキウホシ智キウホシ人キウホシ稀キウホシありキウホシ遠キウホシ知キウホシ人キウホシをキウホシとキウホシいキウホシ

と各侍書の中書未乃中不紀一價示収
し他見をとりは空く府庫乃賦とされ
ア予今幸小私ヒツカを以てん事とほり
依て聊京代乃風潮自合の句と撰てそ
は世世初乃おふん世ありむ其本モトをもつ
とむる時移るおの流る盛人あるなり
此則本立て道生ナル乃教不近なり人氣誹諧
素モトより正道よ非として正道小道心
お小似まらなり

雑舞連詩

誹諧

延文元年二久保関白良基公在
計いよて救解は師探れ
菟玖波を采りてり付合の句也

大向の雀乃門もあるを

引りねとぬく常乃あよ馬 乃采は師

二品親王お聖 名乃多しゆねとやうら

名乃あを毛の起りハこ海うかき 関白茶
丸之長

かくくわさ妻乃ふれ治

花とるく庭の朽木の所すけい 有采佐茂

蛙乃かくハ山いのむ

志す人にもほつぬ事也ちがふれたれ阿法師

多し一時乃きよのこも後

いふして百とを味とぬわらん 茶大細云
さる氏

おこあひ人乃ふんばきこえん

室の戸乃むゆとちひきると見て 良河法師

切菜も替ぬ中の替もて

むとるとの事也久し一れ 後ろを虎
脚製

佛ふ不苦れおこや好む人

極ホハうれやと後ありりりり 教念法師

うてともゆぬを八さりり

捨^ラ 身^ラ 惜^ヤ 花^ヲ 息^シ 唐^カ人^{ヒト}

教もむぬむひうけて切嵐うふ 行中納云
若京定家

大あれたるふ海うしたる 讀念云

松永貞徳源氏乃竟宴子 上京州蓮

ち乃大坊子そ父永種具行やれ

一ふ永も殿下乃津發句也

花ふふ道と海人引糸

九条

秋山公

妻ハ良小云れぬ袖

長徳寺名 揚然

存るとも今も抑留き以て捨て

法印 玄旨

發句部

大抵彼小出とれ巻頭乃句公記して條ハ
畧之初小古代乃句を挙て次小中古乃
句と記し未小予乃句公加ふる而已往古の
句ハ見聞及ひる人稀あるなり 中古漢
句ハ尺や及ふ人多と云もも之乃作

者乃く小糸くくものも人々之疑迷と記
して後小記しゆる蓋古代ハ聰て發句と
ハ云ては一句云捨ても後公云ふ句とて行
句と云ふと云ひ又行句とて云ふと云ひ又
千句百句乃巻頭不定て發句と云ふは
以發句と号せり是一卷ハ發句ありがれ
也中言ハ事起して發句と云智せりは是
く發句小切字ハ用ふ事 宜あり故小
古哲乃撰ひ重々詞乃切字凡三十九々

乃り行句とまひ教句と云ふも付まら切
字は用ひざるもや一は行句ホも教句
ありおとま教句ホも教句ありとらおと
乃り一は切や公用と新小は得と事一
事あつちまてし教ホとらぬ教
後編ふ述人而已

發句 正月六日

○これへ世小やうくをぬ日乃喰ひ葉が宗澄

往古連詩之誹諧行句

法性も花のうけお夜よ入まて
おしりけうん

系さうくくくおすてんるハ誰か人 漢金以
おる教もやまもくた名と思ふ人 空巻法師
まやとた古年やけてまふりり 希大御云
ぬうぬ月も風ある梅乃白ひ廿二宗親王
梅されて松うへ花の小ちひうた 丸中好玄
此水ハお乃うかんら鏡う 加心法師

月もさびしき不意うぬやうなうふ 田代法師
 白折て氷一我をもふ乃余あれ 二葉内太良
 雪乃を川さふまふハ立ふりり 友系秀能
 草もよそそ本のみをふおやそ 京月法師
 ちびんれしみしうさま乃日枝か 冬良親王
 あももこそし 藤む深乃まの雪 田代法師
 雨のち花も雪し戸ふあふりり 俊頼親良
 花ハ風まふハ清きく 別まうふ 三葉尚武
 入おふられまらるま乃余波か 花出家
 誘ひても花は心ぬ風か 越前守
 花あまて雪ふまふか 家路か 十傳法師
 梅雪小草よ本となつやまぬ白ひふ 心教信教
 空りあるむんはも 藤ふ風も 藤 茶太細信
 ちあむも元はし知よまの月 前大細を 茶太細
 ようれあふんはまぬれハ海の系極 是世法師
 静もあは波しれんやう友のむ 松阿法師
 ままふもむさうま風か 源教信良

中古俳諧

和青小師匠おれたる道世軒と極うか貞徳

系はくく花乃鑑より後ひぬ二系お世々

あき道は赤こ一匹むやゑ何と後水尾院お

作の存やなきも流の系はくく二系殿下

おきくお公武とや一あふ年始お白鳥殿下

と新むくお流りかみ乃しら方か鳥丸

もあもや汁乃は戸こあお守と昔越後守

何しと移り出る牛乃喜日外岩倉

甚乃日や日永の者乃がすく酒大綱

さあお如老乃敏派も慶申め外細川

学も筆をきて出よ花乃雨千利休

梅ひとりの蒼之尸とよふまか保中元政上人

ちやくとまのりやるやまの一献お教さ

花盛と絶くく越乃酒屋うお守武

梅のむし香あうく写の筆もか紹巴

海棠氣いやさやく小八梨乃む立圃

季吟万治二年小宗澄菴(寄進)

せれ一十章乃内なるよ

立春

日乃や春のとりきこ三乃あし北村季子吟

以ハク西乃宮まてしひはこうち肖柏子息夢又友

こしもいうまはよあ中山花乃至松翁宗因

さして祝へまのぬ乃すれを足候林道春

春さ別と定やゆけのうら半井卜養

むおけらややるよあい乃柀維舟

佛の産孫人と屋根や落の暮西武

まあぶの乃年の歌や福祿寿良徳

きもお喜ふはやあき乃方尾三

嘆梅乃うわしと思交おハお香

春立や小おん目お交やと乃松徳元

招承子ウリきも三皇乃法代まとお喜ハ正章

人車一もや浮世とあまおん信徳

り春風色江乃人と情こりり芭蕉

雨乃庚申小歌ま

け浮なひひとりる花んか其角

おふ風やふまてぬけは乃泡嵐雪

名乃流うぬあハハ山さく湖春

本がくまて花乃おまひむこ外風虎子
世おれとせ一節はさしむの乃露沾子
おて後おれおれあけ垣の梅沾徳

け職乃はさしあれし
菅神は崇めて於此道は
新まぬ

咲くや此蒼きも救也

神乃毒

泰道

立圃乃云男ハ傍とあり傍ハ
還信するもあけけ白と逆さ

はふよあし秋おぬらうとして

名ハ軒窓梅ハたりともおれあけ立圃

下より返して讀めし

源也よりともたはむ秋乃むと

予うけまのさるハ馬乃水らひあけり
んが人の吐下をさしつもの

友の事ハ梅の香はさしえ源也訪ひ
下より返して讀めし

泰道

ひとみか枝をむむ月モトの下と
あかり

貞門乃松江維舟をセツ入て七経
乃教句派を此く

多きんかなあ草乃あつあうか維舟

予うけ句は志くは猿獲う存を
あかりをくたぬ

七川か草乃名やあのおれ芥
あかり

爰小諸右子當世乃沈滯日くは出くは
忌耕ふ加くは其言く佳句あう中
子臨重あおを撰ひてたふ記くぬ且前
句知まうれし付合乃意味くは安か
こと又と句も解く物と事くは人氣依
悉前句より是派派くぬ風雅よいさあ
好士あは若くはけ道乃枝折ふもあ
う蓋句乃甲しを一その位と判者の
好む新小あおを似し根よ貞教を以て

論一雅うん氣そとく今も子乃十五貞ハ
きのふ乃十貞にやうり今日乃十八貞也
昨日乃廿貞も坊おあんさまは一寸の
位ハ貞乃甲乙小依くさね及一予と
十貞以上は皆秀逸とさる而已

下馬札も秋も文妙子雪とさ

夕ア乃ふりうら一茶故

かけくね神極夢乃蓮

鯉餅乃死て浮ひ一寺乃池

たもこ上戸もいん吸売

朧けく懶ん根乃夏今(落)

あゆめておあうゝ悪の町にて

巨連よゆり油所大鼓

盗く鋸て鋸りてあう

水寺乃橋ふきとる鳥川

白ひ油乃かぶかれまき局

束帯小抱こかぬ名の次布れま門

磯子坂追掛てんり堂持

下り侍候し一程も寐て事不

甘き指紙と共多し其母親

風呂をぬき衣を包むらし物

かお乃を憂へて葉小向瘦て

女乃鞠のむくえん女子遊ふ

らんく回かしく葉の御月

其奈小惚までして風を遊と掛舟

園乃みち地ありえは水の音

赤向し一えへぬ惚とく親

松乃と葉落く一程も焚火

連立てし五葉は乃八は昔日司

端乃葉よ月も若て風をえへ

忽し一減侍軒のは戸梨

そ能哥乃ある則は乃み

葉ハ仲園をばまう京乃乃

撰く日波渡の月小立り

空をなすりしきふ陰月

今起くのみと抱て不化

子猫田へもえへる目白乃飯村ら

砂浜波漸く傳へる音

四糸乃草履へ幕の精々

高き糸へむみ花の湯

鴨抱てまふおはきくさくさ

敷入乃ふたね事とびりきて

衣杉衣に帯も活きもの

新くくたふ乃玉京の月

又大佛へ戻れ又

彩雷と魚乃騒ぐ松の洞

船尻乃葉漬ふとと波うた

まてんはしと磯の騒が

仲間へあな望田あふ

予けま世事入はくちな遠れ

海へ遠逸へるふり

身やれさ乃あつ世あ

雑の聲
泰道

或人乃辨より辨後乃きごひよして何う

小兒の教をよみあはれおは作意

てんを法候しとまひれこせり予

をも覚しより志あり〜乃事毎へうれ

そのなりし〜きふるたやとまひ

え〜ゆり〜ゆりふ真候抄とやん去は

草紙唐因り〜^{クイ}繼^{クイ}警^{クイ}躰^{クイ}乃^{クイ}哥^{クイ}と

つりてまひ小兒乃我まよひ^{ナヅ}誨

ゆきふ物ぶ哥い小漢〜ららめたりゆ
也

嵐の家〜ひ此れゆひ本をと〜り〜り

初きたりり初り四ツとちふ〜とあり

是ハあふ悪〜と解り候〜とまひ

右衛門督の家乃誑若あ合子夢録

好忠〜り〜り

家〜こ〜ち〜は〜ゆ〜い〜し〜は〜乃〜結〜ひ〜松

やも長〜〜けきは是成畧〜〜ぬ
是亦乃事一皆い可〜〜人亦傳一す付
〜〜彼是然〜〜合て終〜〜
謎字乃奇仙ハ魚名小ハ之の
付り〜〜計事とハ諸事ハ世に
去ハゆ〜〜ゆゆゆ〜〜事
あまは今又去ハゆ人もないが
こも〜〜人乃嘯子と居た氣

然うもあれも述ニて作カ信ニて故
〜〜好〜〜事乃あれし予ハ是
た〜〜而已又古今乃序諸本を
あもい〜〜今と仰きて今と悪ハ
ゆも〜〜〜〜是もあ〜〜心
〜〜や人乃足成なくもあ〜〜於
川居たおあれ〜〜は〜〜又
書肆乃好〜〜て愛不附録と

眞名謎字之奇傳 獨吟

泰道

苗代や釣瓶あはれふ水乃言たい

東の酒乃多ふ幸一寺こち

はく雨酒乃唱の流きててさうり

唐の福くふ藤乃某はきまを

以糝桶乃泥をせ月の住之新たこ

我らく客もはやく能くわらぶ

世帯乃おまけふせか内をさうり

海の花あふ枝は嘉宮いせごん

負ふておか子も抱く子も胸をさむ

何うかあかふ云傳うみこい

えりり合ふ心あふ半搔してまは

月あは雪乃ぬきぐ中略ふぐ

凍付れー鹽乃位あうりりり

寺のねりふ若(は)沢菴

素機姫お奉て目乃明く障の都りさち

ふかしくふかしくぬおあおがこ

伊乃がうそ花の年たしこ かまひ

きも業ふかたれた二道 ふんひ

ま
離立や、いふひ乃ひいばをせ いき

朱の重箱相乃赤い道サカサま あらふい

獅子乃尻喧嘩無小強さ青糸 かつを

仲尼の悴名をと俗ツク小呼 ちりと

初孫ハ中廊 四角よきふおのふ せんご

コンカキ
紺搔乃よも吉て兄ふ あいふち

ぬふ唄の流ありあけ川ふさる ふふ

枝も栄へて勢ありとハ竹 ハも

兄才乃二人リッぐぬり山ゆま かせこ

二世の法佛号ぬ弥陀佛 あど

磯草小尾簪も月の旅まうら もと

唐儀中の湯乾茶乃水 まるた

茶湯ふやくくと君まぬ相撲た いがぢ

嗅やふして冬の下巻 くらう

アテコト

師を八日苗事ふりの帯さ くらう

二寸遠ひで知る尺八 くらう

繡の光るふ丸団乃 くらう 二の巻

妻乃天宮ふらる角文字 くらう

芝露月町裏通東金羅方同居

安永し未仲秋 如慮山隠 林泰道著



書林

江戸橋四日市廣小路

竹川藤助版

安永太筑波

復部

二編 近刻

